

2025年2月2日 第二礼拝

説教題「『互いに』と『めいめい』」ガラテヤの信徒への手紙6章1〜5節

主任牧師 加藤 誠

**「互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです。」
「めいめいが、自分の重荷を担うべきです。」ガラテヤ6:2、5)**

先週の第二礼拝で説教に立たれた金丸英子先生（西南学院大学神学部）は、その前日の研修会で、17世紀の英国に誕生したバプテスト教会の信徒たちの姿を紹介してくださいました。当時、全国民が生まれると同時に幼児洗礼を受けて、住所地の教会に自動的に登録されるのが当たり前だった英国にあって、「教会は、自分の意志に基づき自分の口でイエス・キリストは主であると告白した人びとの群れである」と聖書から聴き取った人々によってバプテスト教会は誕生したこと。当時 church と呼ばれていた教会を、バプテストは company（＝「パンを分かち合う交わり」）と表現したこと。教会の入会にあたっては「神を愛し、神に従って誠実に歩む」という約束と同時に「教会の友を愛し、誠実に関わることを約束した等を紹介してくださいました。

以前も紹介しましたが、わずか5人でバプテスト教会を設立した例が残っています。礼拝堂の建物をもたないバプテストは納屋や居酒屋で礼拝をし、国教会公認の牧師がいないので信徒の中から御言葉を語る奉仕者が立てられました。神学校で学んでいない素人がビール樽を講壇に説教する「樽説教師」と軽蔑されて迫害を受けました。しかしどんなに迫害されても、バプテストの人びとは「聖書にこう書いてあるから」と御言葉に立ち、「新約聖書に書かれている教会を目指そう」と company というキリストを分かち合う共同体としての教会を目指したのです。

また講演後の茶話会で「これを失ったらバプテストではなくなるものは何だと思えますか？」という質問に対して金丸先生はこう応えられました。「教職制の教会は、牧師は教団から派遣された指導者という立ち位置だけれど、バプテストは牧師も信徒の一人という立ち位置。そこが大きく違う。もう一つは自由な話し合い。異論が言えなくなったらバプテストではなくなる」と。つまり教職制の教会（牧師など教会のリーダーを教団が承認する仕組みの教会）は「牧師先生がこう言われるから」と牧師の指導に従う圧力が強い。そして牧師に異論を語る人は煙たい存在として外に追いやられてしまったりする。けれどもバプテストは牧師の意見を尊重しつつも、牧師と信徒は同じ立ち位置でみんなで話し合い、総会で決議していく。信仰や意見の多様性を尊重し、「違う」からと言ってはじき出さない。それがバプテストです。

また教職制の教会では、教会は自分たちの牧師を立てるに際して何らかの教団の承認を必要とし、牧師不在の教会は礼典執行のできない不完全な教会と見なされますが、バプテストはその教会の決議だけで牧師を立てることができるし、たとえ牧師不在で

も、信徒だけで礼拝も礼典執行もできる十全な教会だと考えます。

そのように教会の決め事や大切な礼典に信徒が責任をもって関わる分、信徒一人ひとりが聖書を開き、学び、考え続ける責任が求められます。例えば私たち大井教会はなぜ浸礼の形を採用しているのか。その理由を信徒一人ひとりが聖書をもって答える責任があるということです。牧師任せにはしない。逆に言えば、信徒が聖書を学ぶこと、自分で考えることを止めたらバプテスト教会ではなくなるのです。

また、みんなで話し合い総会決議をするには時間もかかり忍耐が求められます。自分と異なる意見に十分心開いて、よく聴いて、どこで一致を見出していけるのかを考え、祈り求めていく。バプテスト教会では一人ひとりが「信仰の成熟」、つまり聖霊により砕かれたやわらかな信仰が求められます。自分自身の胸に手を当ててみると「心開いて、よく聴いて」ということは何と難しいことか。「聖霊の導きとキリストの愛の注ぎを絶えず求める祈り」なしには、わたしはバプテスト教会を共に建てる一人になれない。これはわたしの実感です。

今朝はガラテヤ 6 章を開きました。ここには「互いに」と「めいめい」という矛盾する言葉が出てきます。キリストの体なる教会の交わりとして「互いに重荷を担う」ことを勧めながら、同時に「めいめいが担うべき重荷を忘れるな」と、パウロが釘を刺している興味深い箇所です。

まず 2 節「互いに重荷を担いなさい」。この勧めは 1 節「万一だれかが不注意にも罪に陥った時」の勧めとして語られています。2 節「キリストの律法」つまり「キリストの愛の戒めを生きる」ように招かれた私たちは、間違いを犯した人に対して「こんなこともできないのか！」と上から目線で裁くのではなく、「自分もいつ間違えるかわからない者」という自覚、神さまの前に「同じ罪人」としての自覚をもって関わるのが肝要である。「実際には何者でもないのに」、私たちは「自分はそんな間違いはしない」と棚に上げ「自分をひとかどのように思」ってしまう。それは 3 節「自分を欺くことだ」。素直に「自分の罪深さ、弱さ」を認める自覚をもって「互いに重荷を担いなさい」とパウロは語るのです。

例えば誰かが重荷（リュック）を背負っているのを見て、手を貸してその重荷を背負うのを支えようとする時に、あたかも自分は何もリュックを背負っていない者のように手を差し出すのではなく、自分もまたリュックを背負う者であり、しかもその荷物を誰かに手を添えて支えてもらっている自覚をもって手を差し伸べていく。そのように「互いに重荷を担うこと」と「めいめいが自分の重荷を担うこと」は切り離せないことなのです。このような自覚は、バプテスト教会を共にかたちづくる時に求められる「信仰の成熟」と言えます。自分こそがキリストの十字架なしに生きられない罪人であるという自覚において、お互いに重荷を担い合う教会とされていきたいと思います。